

選択した授業科目の内容です

平成30 年度 [操作ボタン](#)

授業科目名 : **インタラクティブ空間演習**  
英文科目名 : **Interactive Space**

授業コード : **5K091**

開講期間	配当年	単位数	授業形態
通年	1・2年次	2単位	演習
担当教員			
石井拓洋			
杉並校地		デザイン専攻研究関連科目	

科目キーワード	スタディー・スキル、西洋近代主義、近代批判、記号論、批評理論、実体論、関係論、自律美学、関係性の美学、精読
授業内容 1	大学院での芸術文化研究を開始するにあたり、そこで必要となる基礎的研究スキルを習得する。また、文献講読をつづいて、今日まで美や藝術、そして文化領域の研究で議論されてきた主要な論点のいくつかを理解する。本演習を通して、各自における研究的視点の更なる深化を目指す。
授業内容 2	
授業計画	<p>前期：</p> <p>第1週 <b>オリエンテーション</b> ・授業説明。</p> <p>第2～第13週 <b>文献講読</b> ・各回では、芸術・文化研究において意義をもつテキストを取り上げて講読する。 ・講読テキストは基本的にプリントとして配布する。 ・受講生は、それぞれの担当回を事前に決定の上、文献資料の担当個所の要約を発表する。 ・受講生の状況によっては、英文資料を扱う場合もある。</p> <p>第14～第15週 <b>課題論考執筆への支援</b> ・前期課題論考（先行研究の批判的検討）の執筆に関する支援 ・前期まとめ。 ・研究的視座としての「図と地」（メルロ＝ポンティ）の重要性について。</p> <p>後期：</p> <p>第1～第3週 <b>前期提出課題の論考の検討</b> ・個別対応で内容を検討する。</p> <p>第4～第10週 <b>前期課題論考に基づく、受講生による研究発表</b> ・各回につき一人が発表し、その後、参加者全員で内容を検討する（ただし、受講生の状況をみて、文献要約発表への変更の可能性あり）。</p> <p>第11～14週 <b>文献講読</b> ・（前期に同じ）</p> <p>第15週 <b>後期まとめ</b> ・まとめ。 ・まとめをふまえた発展としての試論。「藝術」や「アート」の相対化と、「美の形而上学」（今道友信）の今日的可能性。</p>
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院研究に要する、一般的・基礎的研究スキルの習得。</li> <li>・基本文献の位置づけをもつ資料の講読を通じた、芸術史・文化研究史上で必須な論点の理解。</li> <li>・M1の段階として、アウトプットを急ぐよりも、意義ある考察を行なうためのインプットが、未だ膨大に必要なことを知る。</li> <li>・「記号論」などを通じた、認識・思考と、言語との関係の理解。</li> <li>・たとえばカントの「カテゴリー論」等を踏まえ、各自の認識とは、かくも必然的に不完全なることを理解し、そこから出発する姿勢。</li> <li>・上記目標の総合的帰結として、院生として、「テキスト精読」の重要性を把握する。</li> <li>・今日の「関係性の美学」の台頭の思想的経緯を、西洋近代批判の文脈から理解すること。</li> <li>・さらに、「関係性の美学」を相対化し、あらためて「実体」(substance)や「美」の再考を試みることの可能性を考える。</li> </ul>
授業以外の学習方法 (予習・授業準備・復習等) ※共通理論科目はなるべくご記載ください	<ul style="list-style-type: none"> <li>・附属図書館などのリソースを有効に利用することで、文献をはじめ、多くのまた多種の資料に触れたい。</li> <li>・「きらいなもの」に触れたい。かかる領域にこそ各自の認識の欠落があり、ゆえに研究対象の実態を見誤る原因となるからである。</li> <li>・体裁のよい「わかりやすい」言説には慎重でありたい。混沌と矛盾に満ちた世の実相とは、本来「わかりにくい」はずである。</li> <li>・常に自らの思い込みの存在を疑い、「テキスト」内の「他者性」を看取り、その価値の受容を試みたい。</li> </ul>
履修者への注意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本演習の内容は、大学院研究において必須となる人文社会科学上でのトピックを扱う。つまり、「メディア表現領域」に限らず、すべての領域の院生にとって、何らかの形で資する時間となるはずである。したがって、真摯に研究を志す他領域からの受講生を歓迎する。また、博士前期課程2年生、あるいは博士後期課程の院生も歓迎する。</li> <li>・受講にあたり、いわゆる「インタラクティブ」の語から連想しうる情報技術は要せず、また、各回でもその周辺に積極的に触れるものではない。</li> <li>・授業時間内でも主体的な情報蒐集を適宜行なうべく、毎回、各自でPCを持参することが望ましい。</li> <li>・大学院授業のルールとして、発表担当者が発表当日に欠席することは認められない。</li> </ul>
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業貢献度（問題提起、論点抽出などの授業参加度）(25%)</li> <li>・担当回における発表の内容(25%)</li> <li>・論考[レポート課題](50%)</li> </ul>
テキスト	
参考文献・参考作品	<p>さしあたり、美や藝術、文化研究上の諸概念を理解するための用語辞典を用意することがのぞましい。以下は一例である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・川口喬一・岡本靖正(編)『最新文学批評用語辞典』研究社。</li> <li>・ジョゼフ・チルターズら(編)、杉野健太郎ら(訳)『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』松柏社。</li> <li>・大澤真幸ら(編)『現代社会学事典』弘文堂。</li> </ul>
参考リンク	講義資料集 <a href="http://www.iitak.com/">http://www.iitak.com/</a>